SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

Learning practice in pre-service stage about a collaboration between classroom teachers and school nurses : A case study of interprofessional learning for new teacher education

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梅澤, 収, 鎌塚, 優子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027102

論文

学級担任と養護教諭の連携・協働のための学び
－新しい教員養成カリキュラム・授業実践の取組み－

梅澤　収（静岡大学教育学部）　鎌塚 優子（静岡大学教育学部）

Learning practice in pre-service stage about a collaboration between classroom teachers and school nurses
- A case study of interprofessional learning for new teacher education –

Osamu UMEZAWA・Yuko KAMAZUKA（Shizuoka University）

要 旨

静岡大学教育学部は,「国立大学のミッションの再定義(教員養成分野)」(2013 年確定)に基づいた組織改革に取り組んでおり,2016 年 4 月に「養護教育専攻」と「初等学習開発学専攻」を新設した。この2つの新しい専攻の特色を活かして,「チーム学校の構築」が学校改革の課題となっていることから,2018 年度後期に「学級担任と養護教諭の連携・協働のための学び」をテーマにして両専攻の連携授業(3 年次生対象 23 名)を行った。本論文は,授業の報告書のために作成した学生のレポートの内容から専攻ごとに「授業を行うことによる成果や気づき」に関わる内容を抽出し，意味内容を変えず要約，類似する内容をカテゴリー化した。その結果，初等学習開発学専攻の学生は「視野の広がり・深まり」「学校保健に関わる知識の広がり・深まり」「専門性や役割の理解・職種の認識変化」「連携・協働のイメージ，重要性の実感」「他専攻に及ぼした影響を実感」の５つ，養護教育学専攻の学生は，「視野の広がり・深まり」「専門性の違いや共通点と役割の理解」「連携・協働のイメージ，重要性の実感」「他専攻に及ぼした影響を実感及び自専攻の専門性への深まり」の４コア・カテゴリーが抽出された。「視野の広がり・深まり」「連携・協働のイメージ，重要性の実感」が共通していた。これらはこの授業の大きな成果であるといえる。特にお互いの専門性への理解，尊敬（リスペクト）の感性が醸成されたことの意義は大きい。

キーワード：学級担任・養護教諭の連携協力　教員養成カリキュラム・授業改革　専門職連携教育

Ⅰ　はじめに

平成 28 年 1 月文部科学省は「これからの学校が教育課程の改善等を実現し，複雑化・多様化した課題を解決していくためには，学校の組織としての在り方や，学校の組織文化に基づく業務の在り方などを見直し，「チームとしての学校」を作り上げていくことが大切である」とし，具体的な方策として，専門性に基づくチーム体制の構築を掲げ「これからの学校に必要な教職員，専門スタッフ等の配置を進めるとともに，教員が授業等の専門性を高めることができる体制や，専門能力スタッフ等が自らの専門性を発揮できるような連携，分担の体制を整備する」ことを提示した[i]。

多様な専門性を持つ教職員が一つのチームとして，それぞれの専門性を生かし連携・協働することができるよう環境整備を行っていくというものである。しかしながら，連携・協働の感性（感覚）は，養成段階から醸成される必要がある。この点保健医療福祉の実践の場では，専門職同士の連携(Interprofessional work：IPW）とそれを支えるための専門職連携教育（Interprofessional education：IPE）の重要性が高まっている。世界保健機構(WHO)より IPE を推奨する報告書[ii]が出版されているなど，IPE は国際的にも進められている教育方法である。現在，保健医療福祉領域では，養成段階（pre-service education stage）で多様な領域の学生達がともに学ぶ IPE を卒前教育(pre-graduation education)に取り入れる大学が増加している。IPE とは，「複数の領域の専門職者が連携およびケアの質を改善するために，同じ場所でともに学び，お互いから学び合いながら，お互いのことを学ぶこと」[iii]と定義付けられており，今後学校教育領域においても最も重要な教育方法になると考えられる。この卒前専門職連携教育に関する日本の研究・実践報告は医療福祉系においては散見される[iv]が，教員養成における報告は，水津ら(2017)が養護教諭および栄養教諭養成課程における教職実践演習で実施したプログラム開発のみである。水津らは，専門職連携プログラムを実施したことで，「専門性や役割の理解」「新しい視点・視野の広がり」「連携・協働のイメージ，重要性の実感」が高まるなどプログラムの有効性を報告している[v]。また国外では,すでに米国・インディアナ州立パデュー大学（2016）が特別支援教育の学部学生とスクールカウンセラーの大学院生との専門職間連携教育（IPE）の実践が報告されている[vi]など,教員養成での教育が進められている。

さて，学校現場における，実際の子供たちの心身の課題解決には，学級担任教員（以下，担任教員と略す

場合もある）と養護教諭の連携は欠かせない。しかしながら，担任教員と養護教諭の専門職連携プログラム開発に関する研究は皆無に等しい。

静岡大学教育学部は，「国立大学のミッションの再定義（教員養成分野）」（2013 年 11 月確定）に基づいた組織改革に取り組んでおり，2016 年 4 月に「養護教育専攻」（以下,養護専攻と略すことがある）と「初等学習開発学専攻」（以下,開発専攻,初等開発などと略すことがある）を新設した。この２つの新しい専攻の特色を活かして，「チーム学校の構築」が学校改革の課題となっていることから 2018 年度「学級担任と養護教諭の連携・協働のための学び」をテーマにして両専攻の連携授業（3 年次生対象）を行った。

本研究では，教員養成カリキュラム・授業の新しい試み（挑戦）として，両専攻の連携授業報告のために作成した学生レポートから専攻別に「授業を行うことによる成果や気づき」に関わる内容を抽出し考察する。

Ⅱ　研究方法

1)時期と対象　2018 年 10 月～2019 年 2 月上旬

科目名：学校保健と学校経営

（養護教育専攻 3～４年次：専攻選択科目）

学級担任の理論と実践

（初等学習開発学専攻 3 年次：専攻選択科目）の授業内容及び受講者した学生 23 名（開発専攻 12 名,養護専攻 11 名）

2)授業のねらいと構想

（1）開講の方法　後期・金曜日４コマ[vi]

（2）授業の到達目標とテーマ

＜到達目標＞

・現代の学校の制度・経営の基本理解をふまえ，学校教職員や学校関係者・地域関係者をチーム学校・地域学校として捉えることができる。

・学級担任・養護教諭等の役割を理解するとともに，具体的事例をもとに，連携協力関係を構築していく知識と技法を身に付けている。

＜テーマ＞

学校経営，学校保健に関わる基礎知識を習得すると共に，教諭，養護教諭等の専門性を学校教育活動全体に生かすためのマネジメントについて実践的に理解する。

（3）授業の概要（当初の学習のデザイン・構想）

学級担任としての教諭，保健室に勤務する養護教諭のそれぞれの役割と連携・協働の必要性について，学校保健と学校経営・学級担任の視点から，理論的・実践的に検討する。

授業デザインは，①養護・初等開発出会いステージ，②共通の場での深堀，③分野ごとの深化，④専門分野ごとの発表と共有化の４つのステージを設定し実施した。各ステージの概要について次に示す。

①　養護・初等開発出会いのステージ

学校経営の基本的内容（法規・組織，学校改革，職員）を概説し，特に学級担任との連携協力関係の重要性を具体的事例（学級経営・生徒指導・保護者対応等）に基づいて紹介し，考察した。次に学校経営や学校内外の連携について，具体的な事例に基づき基礎的な知識を概説し，学校保健に関わる学校内の関係職員（事務職員，栄養教諭，図書館司書，特別支援教育に関わる支援員など）及び学校外の行政，医療，福祉領域等の関係機関との連携について，グループ・ワークなどを通じて実践的な理解を促す。その後，さらに以下の 3 つのステージ各４回の授業を行った。

表1 授業計画

1	養護・初等開発出会いステージ	10月5日	学校経営・学級担任から見た学校保健	梅澤
2		10月12日	学校保健から見た学校経営・学級担任	鎌塚
3	共通の場での深堀	10月19日	学校保健と保健教育・保健管理	鎌塚
4		10月26日	学校保健と学校保健組織活動	鎌塚
5		11月2日	学級担任の理論と実践	梅澤
6		11月9日	学級担任の仕事と実践	梅澤
7	分野ごと深化	11月22日	分野ごと	梅澤・鎌塚
8		11月30日		梅澤・鎌塚
9		12月7日		梅澤・鎌塚
10		12月14日		梅澤・鎌塚
11		12月21日		梅澤・鎌塚
12	専門分野ごとの発表と共有化	1月11日	発表と共有化	梅澤・鎌塚
13		1月18日		梅澤・鎌塚
14		1月25日		梅澤・鎌塚
15		2月1日		梅澤・鎌塚

②養護教諭と学級担任の共通の場での深堀ステージ③分野ごとの深化ステージ

①②のステージで学んだことを各分野ごとにさらに学習を深める。

④専門分野ごとの発表と共有化ステージ

グループ・ワークで検討を行い，お互いの専門分野の成果発表を行う。

授業風景 1

授業風景 2

発表の構成は，まず，専攻ごとテーマを設定し，テーマに関わる内容の説明，テーマに関わる課題についてグループ・ワークを実施，グループごとの発表，全体討論と指導教員からのコメントという流れで実施した。初等学習開発学専攻は，①教員の働き方改革について，②学級経営について，③専攻の特性を交えた新たな児童理解について,テーマを設定した。養護教育専攻は，養護教諭の職務の理解を基盤とし，養護教諭の職務５項目を中心に，①保健管理（アレルギーを持つ子供たちへのリスク管理），②健康相談（健康観察の重要性）,③保健室経営・保健組織活動（学校保健委員会テーマの立案と実施）,④保健教育（保健教育の重要性)をテーマとした。

IPE の学習方法としては，意見交換型学習，問題基盤型学習，観察型学習，シュミレーション学習，実践型学習，E-learninng など[vii]が用いられるが，本研究では,討論とケーススタディを用いた意見交換型学習を取り入れた。

3)分析方法

学生が授業成果報告のために作成したレポートの具体的な内容は梅澤・鎌塚（2019）にまとめた[viii]が，本研究では，開発学専攻と養護専攻ごとの「授業を行うことによる成果や気づき」に着目して検討分析を行った。具体的には，専攻ごとに意味内容を変えず要約し，さらに類似する内容を集約してカテゴリー化した。以下の整理では，「気づき」について，代表的データを「」で示し，要約を【】で，コア・カテゴリーを『』で整理した。

ここで，「気づき」とは，学生が本連携授業の討論や学びをリフレクション（省察・振り返り）しレポートに表出した言説を分析検討することで，この授業の内容がどのような特質を伴ったものであったかを導出・発見するための概念（鍵的概念）である。

Ⅲ　結果及び考察

1)初等学習開発学専攻学生の気づき

初等学習開発学専攻学生のレポートを分析したところ，『視野の広がり・深まり』『学校保健に関わる知識の広がり・深まり』『専門性や役割の理解・職種の認識の変化』『連携・協働のイメージ，重要性の実感』『他専攻に及ぼした影響を実感』の５つのコア・カテゴリー及び 22 の気づきが抽出された。

授業風景 3

(1)『視野の広がり・深まり』

第１は『視野の広がり・深まり』があったことが明らかとなった（表 1-1）。

①「それぞれ(初等学習開発学専攻・養護教育専攻）が教師としての多様な価値観や教育観を持っていることを感じることができた」など【1 個々に多様な価値感，教育観を持つことを認識】した，②「分からないところは積極的に聞きながら，互いに教え合い学びを深めることができたと感じている」といった【2 相互作用による学びの深まり】や，【3 異なる専門性と関わることで新たな気づきや発見】，④「1 つの課題に対して双方の専門性を活かしながら意見を出し合い，よりよい意見を作ろうと努めることができた」など【4 専門性を活かした議論によるよりよい意見の創出】ができたことである。

表 2-1視野の広がり･深まり

気づき（要約）		代表的データ
1	個々に多様な価値観，教育観を持つことを認識	①それぞれ(初等学習開発学専攻・養護教育専攻）が教師としての多様な価値観や教育観を持っていることを感じることができた。
2	相互作用による学びの深まり	②分からないところは積極的に聞きながら，互いに教え合い，学びを深めることができたと感じている。養護教諭の視点，（学級）担任の先生の視点がはっきりあらわれ，大変興味深かった。それぞれのよさを互いに引き出しながら，互いの良さを認めながら話し合いを進め，考えを深めることができた。

3	異なる専門性と関わることで，新たな気づきや発見	③違う専門性を持った人と関わることで，新たな気づきや発見があるように感じた。
4	専門性を活かした議論によるよりよい意見の創出	④1 つの課題に対して双方の専門性を活かしながら意見を出し合い，よりよい意見を作ろうと努めることができた。

(2)『学校保健に関わる知識の広がり・深まり』

⑤「養護専攻の学生や先生と深く関わることによって，学校保健についての視点や考え方に触れることが出来た事だ」など【5 養護専攻と深く関わることにより，学校保健の視点や考え方に触れる】，【6 教師に必要な保健領域の専門性を理解】，【7 学校安全保健法は，全ての教員が理解する必要性を理解】，【8 保健の知識を習得することによる迅速な対応】など養護専攻の専門性に触れることにより教員の学校保健の知識の重要性について理解が深められていた（表 2-2）。

表 2-2 学校保健に関わる知識の広がり･深まり

気づき（要約）		代表的データ
5	養護専攻と深く関わることにより，学校保健の視点や考え方に触れる	⑤養護専攻の学生や先生と深く関わることによって，学校保健についての視点や考え方に触れることが出来た事だ。
6	教師に必要な保健領域の専門性を理解	⑥教師に必要な保健領域の専門性，そして養護教諭との連携により子ども達の成長を見守る大切さを知ることができた。
7	学校保健安全法は，全ての教員が理解する必要性を理解	⑦講義の前半で学んだ学校保健安全法は，教員になるべきものであれば誰もが内容を理解しておくべきはずのものであるのに，いままでなにも知らず，今回学ぶことができてよかった。
8	保健の知識を習得することによる迅速な対応	⑧もし自分が担任だったら，養護教諭だったらの立場から考えた活動が興味深かった。担任・養護・校長など学校教員の関わりがとても深く結びついていて，他人事ではないなと思った。それによって，教室内で起こったことでも保健室の先生が来る前に早く行動できたりする。このように考えることができるようになったのも 2 専攻が交流できたおかげだと感じた。これから教員を目指すに当たってとても意味のある授業になったと思う。

(3)『専門性や役割の理解・職種の認識の変化』

⑨「それぞれに専門性があるのだから助け合う姿勢の方が大切なのではないか」など【9 専門性の違いがあるからこそ助け合う姿勢の大切さ】や，【10 養護教諭に対する認識の変化】，⑪「事例を使った学校内で対応の場面では，保護者に対する説明や関わり方，ウィルスなどを学校でこれ以上感染させないような二次三次の対応策，また問題の根本的な原因や解決など専門的な知識が構造的に繋がっていて，すぐにでも学校現場で働けるのではないかと言うぐらい，度肝を抜かされた」など【11 養護教諭の専門性への驚き】，【12 養護教諭の専門性を理解することによる必要性の深まり】など，養護教諭の専門性への理解が深まりさらにお互いの必要性を強く実感できたことが明らかになった（表 2-3）。

表 2-3 専門性や役割の理解･職種の認識の変化

気づき（要約）		代表的データ
9	専門性の違いがあるからこそ助け合う姿勢の大切さ	⑨それぞれに専門性があるのだから助け合う姿勢の方が大切なのではないかと気づくことができた。
10	養護教諭に対する認識の変化	⑩養護教諭の仕事については他人事のように感じていた。学校現場に入っても，仕事内容は違うし，担任が分からないことは養護教諭に任せておけば良いと思っていた。しかし，この授業を受けてその考えが変わった。
11	養護教諭の専門性に対する驚き	⑪事例を使った学校内で対応の場面では，保護者に対する説明や関わり方，ウィルスなどを学校でこれ以上感染させないような二次三次の対応策，また問題の根本的な原因や解決など専門的な知識が構造的に繋がっていて，すぐにでも学校現場で働けるのではないかと言うぐらい，度肝を抜かされた。
12	養護教諭の専門性を理解することによる必要性の深まり	⑫養護教諭ならではの専門性に触れる機会も多く，自分が学級担任になったときには，養護教諭の力を借りることの必要性を強く感じた。

(4)『連携・協働のイメージ，重要性の実感』

⑬「学校保健が学級経営にどのような関わりがあるか具体を知り，学級担任と養護の先生は密接に連携を取る必要性を知った」など【13 学校保健と学級経営の関わりの具体を知ることによる学級担任と養護教諭が密接に連携を取る必要性】，⑭「養護教諭も含め，広くまわりを巻き込んでいくことで，チームとして子どもを見ていく姿勢を大切にしたい」「互いが互いの事について詳しく知っておく必要があるのではないか。互いの理解があってこそのチームプレーであり，連携が上手くいくと考える」といった【14 広く周りを巻

き込んでチームとして子供をみる姿勢】の重要さ，【15 個々の職種の理解が良好なチームプレーを築く基盤】に気づくことができていた。⑯「教員と養護教諭がお互いを意識して教室と保健室を線で結び，常日頃から情報の共有をし，教室内の状況が保健室に行き届く環境を作る必要があると感じさせられた」など【16 日頃から教員と養護教諭が意識的に情報共有する必要性】が捉えられており，具体的な連携環境や協働の具体的イメージを掴むことができたようである。【17 互いの専門性を活かす必要性・学校のマネジメントにおける有効性を体験】，【18 実際の学校現場で教師たちが連携しながら対応している具体を理解】，【19 日頃の情報共有や連携，リスクに対する意識の高さやリスクの事前予防の重要性】など連携・協働の具体を理解し，【20 学級担任と養護教諭の具体的な連携のアプローチを理解することで学び続ける重要性を認識】することができていた。【21 学校のよりよい運営は，教師の健康管理やメンタルヘルスケアも重要】であるという教師としての自己管理の重要性に対する「気づき」もあった。このように『連携・協働のイメージ，重要性の実感』をできたのではないかと考える（表 2-4）。

表 2-4 連携・協働のイメージ，重要性の実感

気づき（要約）		代表的データ
13	学校保健と学級経営の関わりの具体を知ることによる学級担任と養護教諭が密接に連携を取る必要性	⑬学校保健が学級経営にどのような関わりがあるか具体を知り，学級担任と養護の先生は密接に連携を取る必要性を知った。
14	広く周りを巻き込んでチームとして子供をみる姿勢	⑭養護教諭も含め，広くまわりを巻き込んでいくことで，チームとして子どもを見ていく姿勢を大切にしたいと考える。
15	個々の職種の理解が良好なチームプレーを築く基盤	⑮互いが互いの事について詳しく知っておく必要があるのではないか。互いの理解があってこそのチームプレーであり，連携が上手くいくと考える。
16	日頃から教員と養護教諭が意識的に情報共有する必要性	⑯教員と養護教諭がお互いを意識して教室と保健室を線で結び，常日頃から情報の共有をし，教室内の状況が保健室に行き届く環境を作る必要があると感じさせられた。
17	お互いの専門性を活かす必要性・学校のマネジメントにおける有効性を体験	⑰互いの専門性を活かす必要性や学校のマネジメントにおける有効性を体験しました。
18	実際の学校現場で教師たちが連携しながら対応している具体を理解	⑱養護専攻と合同で行ったことで，実際の学校現場で教師たちが連携しながら日々の出来事に対応していることがよくわかり，連携を図るという意味では良い練習となったと思う。
19	日頃の情報共有や連携，リスクに対する意識の高さやリスクの事前予防の重要性	⑲日頃の情報共有や連携，リスクに対する意識の高さやリスクの事前予防などがいかに重要であるか，そして実際起きてしまった時に瞬時に適切な対応を行うことができるかは，子供たちの命に関わる大変重要なことであると学んだ。
20	学級担任と養護教諭の具体的な連携のアプローチを理解することで学び続ける重要性を認識	⑳実習の時に，クラス担任と養護教諭がかなり密に連絡を取り合っていた姿から，学校をよりよく運営するため，また，子どもたちのためにお互いの状況を理解し合うことは大切なのだと強く実感したが，実際どのようにアプローチをしていけば良いのかという点に関しては，未知のままだった。「教師を目指すうえで，私たちには知らないことがまだたくさんあり，様々な範囲で学習を続けていかなければならない。」という事実を認識するということができる。
21	学校のよりよい運営は，教師の健康管理やメンタルヘルスケアも重要	㉑学校をよりよく運営していくためには，子どもはもちろん，教師の健康管理やメンタルヘルスケアにもしっかりと向き合っていかなければならないと思う。

(5) 他専攻に及ぼした影響を実感

㉒「養護学生には開発専攻の知識と出会ったことなかったようで，私が当たり前だと思っていたことが当たり前ではなかったようである。専攻の合同の授業では出会ったことのない者同士が出会うことは非常に意味のある授業であると思う」など【22 自専攻の学びが他専攻へ及ぼした影響を実感】していた（表 2-5）。

表 2-5 他専攻に及ぼした影響を実感

気づき（要約）		代表的データ
22	自専攻の学びが他専攻へ及ぼした影響を実感	㉒養護学生には開発専攻の知識と出会ったことなかったようで，私が当たり前だと思っていたことが当たり前ではなかったようである。専攻の合同の授業では

		出会ったことのない者同士が出会うことは非常に意味のある授業であると思う。

2)養護教育専攻学生の気づき

『視野の広がり・深まり』『専門性の違いや共通点と役割の理解』『連携・協働のイメージ，重要性の実感』『他専攻に及ぼした影響を実感及び自専攻の専門性への深まり』の４つのコア・カテゴリー及び 21 の気づきが抽出された。コア・カテゴリーごとに結果を示し考察する。

(1)『視野の広がり・深まり』

①「今回の交流で，初めて開発学の学生がどのようなことを学んでいるのか知ることができた」など【1 他専攻の学びを理解】することで，②「お互いの職務内容の違いを実感し，それぞれが大切にしていることを受け止めることができたと感じた」など，【2 お互いの職務内容の違い及び大切にしていることの理解】が深まったと考えられる。また，【3 養護教育と初等開発の着眼点の違いが顕著に示された。】ことで，【4 異なる角度からの意見を聞くことにより自専攻の思考の偏りに気づく】ことができたと言える。さらに⑤「お互いのことを知り，理解しようとできるのもこのような交流型の授業の強みだと思う。…お互いの教育観や，３年間通して学んできたことをリスペクトしあう空気感ができていたからではないかと考える。」など，【5 お互いにリスペクトをもってかかわり合えたという実感】など『視野の広がり・深まり』はこの授業の大きな成果であるといえる（表 3-1）。

表 3-1 視野の広がり･深まり

	気づき（要約）	代表的データ
1	他専攻の学びを理解	①今回の交流で，初めて初等学習開発学の学生がどのようなことを学んでいるのか知ることができた。
2	お互いの職務内容の違い及び大切にしていることの理解	②お互いの職務内容の違いを実感し，それぞれが大切にしていることを受け止めることができたと感じた。
3	養護教育と初等開発の着眼点の違い	③グループ・ワークを専攻別で行ったことで，養護教育と初等開発の着眼点の違いが顕著に示された。前者が子供の発達段階と心身の特徴を念頭に置いて健康に関し推測をしている一方で，後者は教室内で考えられる原因をはじめ，子供の置かれた環境面にまず着目している傾向がみられた。・立場や専門が違うと，同じ児童生徒に関して考えたときにも「最初に観るポイント」が異なるということが，今回のグループ・ワークから再認識できた。
4	異なる角度からの意見を聞くことにより自専攻の思考の偏りに気づく	④さまざまな場面で担任の先生の視点をもった考えに触れることができ，担任ならではの視点と養護教諭ならではの視点があることを感じた。特に養護教諭専攻の学生による健康相談についての発表での，健康観察表の記録から子どもの問題を予測するワークでは，担任ならではの視点での読み取りと，養護教諭ならではの視点での読み取りがはっきりわかれ，この２つの視点が合わさることによって，子ども理解がより充実したものになると考えた。それと同時に，私たち養護教育専攻の思考の偏りも感じた。今までは養護教育専攻の学生や先生との間でのやりとりしかされておらず，グループ・ワークでも，養護教諭の目線でしか考えを展開することができていなかった。しかし，今回同じ課題に対しても，新たな視点をたくさん拾うことができたので，大きな学びに繋がったと思う。
5	お互いにリスペクトをもってかかわり合えたという実感	⑤新設の講義で，手探りでの挑戦ではあったが，お互いお互いにリスペクトをもってかかわりあえたことは非常に効果的だったと思う。同じ議題についてそれぞれが話し合い，意見を交換する場面が多くあり，その中でそれぞれのポリシーや，３年間の学習で積みあがった考え方などが出会い，交流の中で絡み合っていくのが感じられ，教育とは奥の深いものだなあと考えさせられた。お互いのことを知り，理解しようとできるのもこのような交流型の授業の強みだと思う。…お互いの教育観や，３年間通して学んできたことをリスペクトしあう空気感ができていたからではないかと考える。

(2)『専門性の違いや共通点と役割の理解』

【6 自分の学んでいる分野の専門性や他専攻との違いを理解】し，⑦「今まであまり知らなかった学級担任のことを深く学ぶことが出来た。連携協力するにあたり，お互いの職務を知ることは大切だと考える」など【7 学級担任・職務についての学びの深まり】，【8 学級担任が大切にしたいと考えていることを理解】などお互いの専門性の違い，大切にしていることを理解し，⑨「同じ教員として共通する部分も多くあるということも学ぶことができた」など【9 教員としての共通点の発見】もあった（表 3-2）。

表 3-2 専門性の違いや共通点と役割の理解

気づき（要約）		代表的データ
6	自分の学んでいる分野の専門性や他専攻との違いの理解	⑥今回の授業は，養護教育専攻と初等学習開発学専攻の合同の授業ということもあり，自分の学んでいる分野の専門性や他専攻との違いがよく分かる授業だった。
7	学級担任・職務についての学びの深まり	⑦今まであまり知らなかった学級担任のことを深く学ぶことが出来た。連携協力するにあたり，お互いの職務を知ることは大切だと考える。
8	学級担任が大切にしたいと考えていることを理解	⑧学級担任が大切にしたいと考えていることを知ることができて良かったと感じる。将来学校現場で，お互いの職務や大切にしたいことを理解し合って，連携協力していきたいと考えた。
9	教員としての共通点の発見	⑨同じ教員として共通する部分も多くあるということも学ぶことができた。
11	チーム学校の具体的イメージの理解	⑪チーム学校といわれる中で，具体的にイメージできなかったものが，この授業を通して実感できたいい機会だった。
12	担任と養護教諭がお互いの職務を理解した上で連携し，協力していくことが重要	⑫担任と養護教諭の違いや担任と養護教諭の大変さ，難しさなど担任と養護教諭がお互いの職務を理解した上で連携し，協力していくことが大切だということを学べた。
13	学生のうちからチーム学校の具体的イメージを醸成する姿勢	⑬学生のうちから，今まで以上に相手の考え方をよく聴き，チーム学校を具体的にイメージした姿勢づくりを鍛えておきたいと痛感した。

(3)『連携・協働のイメージ，重要性の実感』

⑩「担任の先生と養護教諭の視点から子どもたちを観察・支援していくことで，子どもたちの本質に迫っていけるのではないかと思う」など，【10 学級担任教員と養護教諭の両視点から観察・支援によって，子どもたちの本質に迫れる】ことや，【11　チーム学校の具体的イメージの理解】が深められていた。また，【12 担任と養護教諭がお互いの職務を理解した上で連携し，協力していくことが重要】であることに気づくなど，チーム学校の具体的なイメージを持つことが出来たのではないかと考える。さらに⑬「学生のうちから，今まで以上に相手の考え方をよく聴き，チーム学校を具体的にイメージした姿勢づくりを鍛えておきたいと痛感した」など，【13 学生のうちからチーム学校の具体的にイメージを醸成する姿勢】づくりが大切であることに気づくなど『連携・協働のイメージ，重要性の実感』があったことは，本授業のテーマである「学校経営，学校保健に関わる基礎知識を習得すると共に，教諭，養護教諭等の専門性を学校教育活動全体に生かすためのマネジメントについて実践的に理解する。」ことができたのではないか（表 3-3）。

表 3-3 連携･協働のイメージ，重要性の実感

気づき（要約）		代表的データ
10	担任教員と養護教諭の両視点からの観察・支援によって子どもたちの本質に迫れる	⑩担任の先生と養護教諭の視点から子どもたちを観察・支援していくことで，子どもたちの本質に迫っていけるのではないかと思う。

(4)『他専攻に及ぼした影響を実感及び自専攻の専門性への深まり』

⑭「同じように教育について学んでいても，視点のずれが生まれることを知り，また，どの考え方の違いをうまく擦り合わせながらに導いていく力，そして他人の考え方から柔軟に学んでいく力こそが現場で求められている力なのではないだろうか」など【14 視点考え方の違いを擦り合わせながら柔軟に学びを深めることの重要性】を理解し，さらに【15 他専攻の視点を取り入れることで改めて養護教諭の専門性を理解】することができたようである。一方，⑯「私は，養護教諭の職務や専門性について十分に説明できなかったと反省している。今回のプレゼンをする中で，他専攻の学生は養護教諭の職務や専門性について予想以上に知らない学生が多いということに気づいた」など【16 他専攻が養護教諭の職務を理解していないことへの気づき及び職務を説明することで自専攻の専門理解が深まる】ことも示されていた。他専攻との討議は，異なる視点や他職種の理解が深まるだけでなく，自専攻の専門性に対して新たな視点が加わりより深化することや，また自専攻の専門性の理解の薄さにも気づきがあったことは非常に意義があったと言える。また⑰「養護教育の学生の発表を通して，養護教諭がどのようなことを行うか，養護教育専攻としてどのような学習をしているか共有することができた」など【17 養護教諭の職務を共有，発信できたことの満足感】が得られたこと，⑱「養護教諭の職務について知ってもらったり，担任がどのような視点で物事を考えているかを知ったりすることで，働きだした際に担任と養護教諭が連携しやすくなるのではないかと感じた」といった【18 養護教諭，担任の職務を知ることで教員になってから連携のし易さを実感】できたことや，⑲「違いがあるからこそ，自分一人で子供の健康を考えるよりも連携し合って子どもを見つめ，意見や情報を共有することが大切であると実感できた。」など【19

違いがあるからこそ，自分一人で考えるよりも連携し合って，意見や情報を共有することが大切】であることが実感できていた。さらに学生は今後の方向性として⑳「講義の開始当初は，初等学習開発学専攻の視点や考え方について分かっているような気持ちになっていたが，活動を通して，しっかりと交流しなければ通じ合うことができないということが分かり，今後も他の専門性をもった学生等と積極的に交流をしていきたいと思うようになった。」と【20 互いの職の理解を深めるためには他の専門性をもった学生等と積極的に交流が重要】であることや，【21 学生のうちからチーム学校の具体イメージ】を持つことの大切さについて気づきがあるなど，『他専攻に及ぼした影響を実感及び自専攻の専門性への深まり』があったことが示されていた（表 3-4）。

表 3-4 他専攻に及ぼした影響を実感及び自専攻の専門性への深まり

気づき（要約）		代表的データ
14	視点考え方の違いを擦り合わせながら柔軟に学びを深めることの重要性	⑭同じように教育について学んでいても，視点のずれが生まれることを知り,また,どの考え方の違い尾をうまく擦り合わせながらに導いていく力,そして他人の考え方から柔軟に学んでいく力こそが現場で求められている力なのではないだろうか。
15	他専攻の視点を取り入れることで改めて養護教諭の専門性を理解	⑮新たな考えを知ることを通して,自分自身も養護教諭の職務について改めて理解する機会となった。
16	他専攻が養護教諭の職務を理解していないことへの気づき及び職務を説明することで自専攻の専門理解が深まる	⑯私は,養護教諭の職務や専門性について十分に説明できなかったと反省している。今回のプレゼンをする中で,他専攻の学生は養護教諭の職務や専門性について予想以上に知らない学生が多いということに気づいた。学校現場で自分の仕事を理解してくれない先生が多いと,連携を図ることが難しくなると思う。そうなった時に自分の仕事や専門性について正しく,わかりやすく説明できる力がないといけないと感じた。今後は養護教諭の職務や専門性についてもっと理解を深めていきたい。・他専攻とのかかわりから改めて自分の専門性を見つめなおし,他専攻の特性を知ることで養護教諭以外の教師の立場・職務についても理解をふかめ,そして他者への意見や情報発信の実践ができる,という点で,学校経営と学校保健の講義は非常に有意義なものであったと思う。
17	養護教諭の職務を共有,発信できたことの満足感	⑰また,今回の各専攻の発表のように,同じ教員でも学んでいる内容が違うので,その紹介ができたのは良い機会であったと思う。特に私たち養護教育専攻は一人職であり,自ら職務の発信をしていかなければならない。周囲に発信していく力などは連携をとる上で欠かせないものだと思う。説明することの難しさなども感じたが,理解してもらえることの大切さなどを感じることができた。・養護教育の学生の発表を通して,養護教諭がどのようなことを行うか,養護教育専攻としてどのような学習をしているか共有することができた。
18	養護教諭,担任の職務を知ることで教員になってからの連携のし易さ	⑱養護教諭の職務について知ってもらったり,担任がどのような視点で物事を考えているかを知ったりすることで,働きだした際に担任と養護教諭が連携しやすくなるのではないかと感じた。
19	違いがあるからこそ，自分一人で考えるよりも連携し合って，意見や情報を共有することが大切	⑲違いがあるからこそ,自分一人で子供の健康を考えるよりも連携し合って子どもを見つめ,意見や情報を共有することが大切であると実感できた。
20	互いの職の理解を深めるためには他の専門性をもった学生等と積極的に交流が重要	⑳講義の開始当初は,初等学習開発学専攻の視点や考え方について分かっているような気持ちになっていたが,活動を通して,しっかりと交流しなければ通じ合うことができないということが分かり,今後も他の専門性をもった学生等と積極的に交流をしていきたいと思うようになった。
21	学生のうちからチーム学校の具体イメージをもつことの大切さ	㉑学生のうちから,今まで以上に相手の考え方をよく聴き,チーム学校を具体的にイメージした姿勢づくりを鍛えておきたいと痛感した。

授業風景４

Ⅳ　成果と課題

学生の授業の振り返りを分析した結果，初等学習開発学専攻の学生は『視野の広がり・深まり』『学校保健に関わる知識の広がり・深まり』『専門性や役割の理解・職種の認識の変化』『連携・協働のイメージ，重要性の実感』『他専攻に及ぼした影響を実感』の５コア・カテゴリー，養護教育学専攻の学生は，『視野の広がり・深まり』『専門性の違いや共通点と役割の理解』『連携・協働のイメージ，重要性の実感』『他専攻に及ぼした影響を実感及び自専攻の専門性への深まり』の４コア・カテゴリーが抽出された。『視野の広がり・深まり』『連携・協働のイメージ，重要性の実感』が共通していた。『連携・協働のイメージ，重要性の実感』については水津（2017）らの研究結果の一部とも一致していた。共同授業を実施することで,IPE の定義である「複数の領域の専門職者が連携およびケアの質を改善するために，同じ場所でともに学び，お互いから学び合いながら，お互いのことを学ぶこと」を通じて,連携・協働の基盤となる本質についての理解が深まったと考えられる。お互いの職種の専門性を理解し,尊重しながら,具体的な場面でどのような役割を担うかのイメージが醸成されたと推察される。こうした取り組みは,時間をかけて継続的に行うことが大切である。教育現場で起きている様々な問題はより複雑化,多様化,深刻化している。困難な状況を瞬時に分析し,適切に判断する能力が必要とされる。また,多種多様なスタッフが一つの事例に対して様々な専門性を持ち多様な知識やアプローチで支援に臨むため,多くの職種の理解が必要とされる。今後さらに共同授業の学科を広げていくことや場合によっては他大学との連携なども視野に入れた教育プログラムを開発していく必要もあるだろう。

しかし，今回の結果は，本学の教員養成の一つの課題が明確になったとも言える。特に印象的だった気づきに「今回のプレゼンをする中で,他専攻の学生は養護教諭の職務や専門性について予想以上に知らない学生が多いということに気づいた。学校現場で自分の仕事を理解してくれない先生が多いと,連携を図ることが難しくなると思う」「私たち養護教育専攻の思考の偏りも感じた。今までは養護教育専攻の学生や先生との間でのやりとりしかされておらず，グループ・ワークでも，養護教諭の目線でしか考えを展開することができていなかった。」などの気づきがあった。つまりこの授業を経験しなければお互いの職を理解することや思考の偏りに気づけないまま教職に就いてしまうということなるため，チーム学校を築く上での弊害があると考えられるからである。英国では 2000 年に起きた大規模小児病院での術後過剰死亡の事例や虐待死の事例から多数の専門機関・専門職が関わっていたにも関わらず子供を死亡させてしまった事件が社会問題化し,関連機関や人の連携不足が指摘された。この事件を機に IPE の取り組みが強化され,多数の大学の教育課程に取り入れられるようになった。現在,我が国の教育現場においても連携不足によって重大な事故につながってしまった事案が数多く発生している。

今後，チーム学校に向けて，本授業のような専門職連携教育のプログラム開発は非常に重要であると考える。今回の試みを通じて特に養成段階からお互いの職種の理解，「respect」の感性を養うことの意義と重要性を改めて考えることができた。今後はプログラム開発と共に教育効果の評価についても研究していく必要があるだろう。（鎌塚）

1998 年版学習指導要領以降，「心身の健康の保持増進に関する指導」や「こころ」のケアが学校教育の重要課題となり，2009 年 4 月「学校保健安全法」（旧・学校保健法の改正）と食育規定を盛り込んだ「改正学校給食法」も施行されている。文部科学省ホームページ（HP）には「学校保健，学校安全，食育」のサイトもある[ix]。以上のことからも，この視点から学校全体の経営・運営体制をどう整備し構築していくかは，学校経営の大きな課題である。

しかし，翻って学級に所属する子どもたち一人ひとりについては，学級担任教師が，学習指導及び生徒指導の両面において，ほとんどすべての仕事の責任者・窓口となる。そのために，チーム学校や教職員間の同僚性がうまく機能していない場合に，しかも子どもや保護者との対応がうまくいかず，また信頼関係が構築できない場合には，多忙化と心労ストレスによる精神疾患に繋がりやすい。そこで，本授業では，チーム学校の視点で教員・職員・地域と連携・協働すること，とりわけ，養護教諭をはじめ栄養教諭，スクール・カウンセラー（SC），スクール・ソーシャルワーカー（SSW）とどのように連携・協働していくのかについて，将来の学級担任教師が実践的なテーマとして学ぶことをねらった。学生のレポート等からこの実践的テーマを学ぶことの意義は学生に伝わったと考える。

今後は，専攻混成型のグループを編成し，実践的なテーマ（課題）を発表し共有する授業を行いたい。

今後の課題としては，「心身の健康の保持増進に関する指導」や「こころ」のケアの課題について，学級担任と養護教諭のそれぞれの専門性と職務を基礎にしながら，学校教育活動全体に繋げていく実践的なあり方を学ぶ必要がある。そのための「大学教育における授業・学習デザイン」が求められるが，学習指導要領・総則の「見方・考え方」，「教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成」「カリキュラム・マネジメント」「学校段階等間の接続」等を総合的に捉えた学校と教師の再構築（改革）の視点＜ホリスティックなアプローチ＞で行う必要があるだろう。（梅澤）

最後に，本合同授業は，以上のような学生レポートから非常に効果のある成果をあげたと考えている。しかし,今回のような授業科目の設定がカリキュラム上一般化できるのか,望ましいのか等については,過密なカリキュラムの中で専門職連携教育を実践的な見地からどのように設計していくのが現実的なのかを含め検討していく必要があろう。

なお,執筆は,鎌塚・梅澤の共同作業として行い,「成果と課題」はそれぞれの専門分野からまとめた。

注

[i]文部科学省（2015）「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1366271.htm(2019.11.10 閲覧)

[ii]Hoplins,D（ed.）(2010)“Framework for Action on Interprofessional Education and Collaborative Practice” World Health Organization Press 2010 http://www.who.ijt/hrh/resources/framework action/en/（2020.1.19 閲覧）本書は WHO 専門職連携教育・連携医療研究班が作成した。三重大学（2014）による翻訳『専門職連携教育および連携医療のための行動の枠組み』が下記にある(2020.1.23 閲覧)。https://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/70185/WHO_HRH_HPN_10.3_jpn.pdf?sequence=8&isAllowed=y

[iii]CAIPE（2010）（UK Centre for the Advancement of Interprofessional Education：英国専門職連携教育推進センター）による定義。https://www.caipe.org/about-us（2020.1.23 閲覧）なお,埼玉県立大学編（2009）『IPW を学ぶ利用者中心の保健医療福祉連携』中央法規出版 2009 参照。

[iv] 以下の先行研究がある。

①亀田直子・鎌田佳奈美・池田友美・菊田真穂・山本十三代・辻琢己（2019）「小児病棟での総合看護学実習における薬学部生との専門職連携教育実践報告」摂南大学看護学研究 Vol7 No1 2019 pp.12-19

②佐々木智絵・小川純子・坂下貴子・小板橋恵美子・雀部沙絵・藤野達也・本多敏明・岡澤順・田中秀子（2019）「学部教育における多職種連携教育に関する文献レビュー ：教育プログラムと評価に関する検討」淑徳大学看護栄養学部紀要（11）pp.41-48 2019

③吉村基宜・田口孝行・常盤文枝（2019）「保健医療福祉系大学における専門職連携教育（IPE）評価尺度の作成」保健医療福祉科学 8 巻 pp.1-9 2019

④志田淳子他（2019）「看護学生が認識するクリニカル IPE の効果および課題の明確化―同じフィールドで行われている他大学薬学部との IPE の試み―」日本看護科学会誌 Vol.39 pp.1-9 2019

[v]水津久美子・丹佳子（2017）「養護教諭・栄養教諭養成教育における他職種連携を主眼とした演習プログラムの開発に関する研究」山口県立大学学術情報第 10 号（高等教育センター紀要第 1 号）2017 pp.103-115

[vi] 教務上は読み替えによって単位認定を行った。

[vii]Dobbs-Oates,J &Wachter Morris,C(2016)“ The case for interprofessional education in teacher education and beyond”Journal of Education for Teaching International research and pedagogy Volume42･1 pp.50-65 なお,Barr H, et al,eds(2005)：*Effective Interprofessional Education：argument, assumption and evidence* Blackwell, Oxford,2005 がある。

[viii]梅澤収・鎌塚優子（2019)『新しい教員養成カリキュラムの挑戦～学級担任と養護教諭の連携・協働のための学び～』<静岡大学教育学部連携授業チーム報告書> 2019 本報告書を基礎に日本教育大学協会研究集会（岡山大学 2019.10.5）で発表した。

[ix]文部科学省のウェブサイト「学校保健，学校安全，食育」https://www.mext.go.jp/a_menu/01_k.htm。(2019.11.10 閲覧)を参照のこと。

本 HP は，「学校保健」「学校安全」「学校における食育の推進・学校給食の充実」「栄養教諭制度」で構成されている。特に「学校保健」サイトの「学校保健の推進」で取り上げている「薬物乱用防止教育」はじめ 17 項目は，教員と養護教諭が共有しておくべき内容であろう。

関連して，文部科学省は『現代的健康課題を抱える子供たちへの支援～養護教諭の役割を中心として～』（2017 年 3 月）に出しており参考となる。しかしながら，この「現代的健康課題を抱える子供たちへの支援」の問題は，「養護教諭の役割を中心として」というよりは，「教員と養護教諭の連携協力の実践的なあり方」として示すべきではないかと本授業実践を通じて感じたところである。